

平成22年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」
共同利用型の研究成果報告書

伊藤美和子(大阪大学・神戸大学非常勤講師)

(研究目的)

申請者は言語習得論、異言語教育学の立場からヴィゴツキーの発達論を研究してきた。ヴィゴツキー理論の哲学的基礎である言語思想を明らかにするための一つのアプローチとして、本研究では、ヴィゴツキーが言語学者ポテブニャからどのような影響を受けていたのかを分析する。

(利用内容)

申請者は2010年7月7日～10日と2011年2月9日～10日の2回、北海道大学スラブ研究センターと北海道大学附属図書館を訪問した。ヴィゴツキーの言語思想に強い影響を与えたポテブニャの著作がまとまって所蔵されており、効率的に必要な資料を収集することができた。ポテブニャの著作が閲覧できたのはもちろん、関連図書にも恵まれた。たとえば A. A. Потебня – Исследователь славянских взаимосвязей Тезисы Всесоюзной научной конференции (октябрь 1991), Часть 1-2, Харьков: ХГУ では、現代でもポテブニャ言語学が継承されていることを確認することができた。

(研究成果)

フンボルトから始まりフロレンスキーにまで展開されている「内的形式」という概念を、ヴィゴツキーと彼に影響を与えた言語学者ポテブニャの著作において比較し、ヴィゴツキーのポテブニャ理解を読み解いた。その結果、ヴィゴツキーは初期の著作『芸術心理学』においては、「内的形式」を例にポテブニャを主知主義として批判しているが、晩年の代表作『思考と言語』では「内的形式」を拠り所とし、子どもの複合的思考の特徴を解明していることが明らかになった。こうした研究結果を以下にあげる論文にまとめ、公表した。

「ヴィゴツキーによるポテブニャの批判と受容－「内的形式」の解釈を中心に」『ヴィゴツキー学』別巻第1号: 17-27. 2010年.

2回目の滞在では、前回滞在時の研究からヴィゴツキーとの関連が明らかになったシュペットの言語論に関係する資料を集めることができた（たとえば Г. Г. Шпет, Сочинения, М.: Правда. 1989.）。研究をまとめ、成果を公表できるように努力したい。末筆ながら、このような貴重な機会をくださったスラブ研究センターに感謝の意を記したい。